

房総の連弧文（系）土器について

大網信良

1 本稿の視座

連弧文土器は、加曽利 E 式期の中頃に盛行する土器群で、関東地方西南部の武蔵野台地や多摩丘陵、相模原台地を分布の中心とする。板橋区（現・練馬区）中新井町出土の「頸部と体部に弧線を主とした沈線がある」土器という山内清男氏の指摘を嚆矢とし、その位置づけについて山内氏は、「加曽利 E 式の新しい部分に属」し、加曽利 E 式とは「別の型式に属する」（いずれも山内1940）土器群とされた。その後、1970 年代に「連弧文土器」という呼称が普及し、主に関東地方西南部の土器研究において検討が進められてきた土器群である。

関東地方西南部は、関東平野の加曽利 E 式土器、そして中部高地の曾利式土器という中期後葉を通して存続する二つの土器型式が接触する地域として知られている。当該地域では、加曽利 E 式と曾利式が同じ遺跡や遺構から伴って出土し、また両者の器形や文様が入り混じった折衷土器が多数製作されることが一般的で、連弧文土器の出現にはこうした地域的特色が大きく作用したものと考えられる。

連弧文土器は、出現から間もない加曽利 E2 式の後半期には盛行し、関東地方西南部では加曽利 E 式や曾利式を凌ぐほどの出土量に達する。しかしながら加曽利 E3 式期になると、多摩丘陵や武蔵野台地西部では文様の粗雑化とともに急速に減少傾向に転じることとなる。他方、当該期の武蔵野台地東部から関東地方東部では、加曽利 E3 式の地文磨消手法を用いた連弧文土器が多く見られることから、加曽利 E2 式から加曽利 E3 式にかけ、連弧文土器の分布域が東方へ移動した可能性が指摘されている（永瀬2008）。こうした現象に関連し、戸田哲也氏はとりわけ地文磨消手法を用いた波状の連弧文土器を「千葉型連弧文土器」と呼称し、東京湾沿岸を中心に分布する特徴的な土器群として着目している（戸田2010）。

上述した加曽利 E3 式期における連弧文土器の様相は、従前の多摩丘陵や武蔵野台地を中心とした連弧文土器研究では資料的制約から未だ検討の余地を多く残している。「連弧文土器がどのように消えていくか」という視点から、対象地域を拡充して検討を深化させる必要性が指摘される。そこで本稿では、「千葉型連弧文土器」の今日的評価も含め、千葉県域における連弧文（系）土器の様相を整理することで上記の検討課題の一助としたい。

2 連弧文（系）土器の型式学的特徴について

連弧文土器は、連続する弧線文や波状文を主文様とする土器群で、その型式学的特徴は、①口唇部・口縁部・頸部・胴部の四つの施文域で構成される点、②主文様の連弧文・波状文が口縁部・胴部施文域の両方あるいは片方に施文される点、③隆帯を用いず、全ての文様が沈線や刺突により施される点、のおおむね 3 点に集約される。

主文様以外の文様要素としては、口唇部・頸部の平行沈線文や刺突文、口縁部・胴部の懸垂文や区画文

などがあり、また器形についても口縁の内湾・外反など複数のパターンが見出される。また連弧文土器の主文様以外の型式学的特徴を有しながら主文様のみ欠落する土器群や、上述の①～③に当てはまらない土器群は連弧文系土器と呼称しており、本稿も同様の定義で連弧文土器・連弧文系土器の呼称を使用する。

連弧文土器の編年については、連弧文土器を特徴付ける型式学的属性の組み合わせを統計学的に分析した永瀬史人氏により、1段階（出現期）、2a/2b 段階（盛行期）、3段階（衰退期）の3段階4細分の変遷案が示されている（永瀬2008）。また拙稿では、永瀬氏の変遷案に立脚しつつ、型式学的特徴と共伴資料によって3段階を3細分する変遷案を提示した（大網2016）（第1図）^①。

連弧文土器と他型式との併行関係は、新地平編年（黒尾・小林・中山1995）、および黒尾和久氏による加曽利 E 式編年（黒尾1995）と対照すると、連弧文土器全体では新地平編年11b～12b 期、黒尾編年加曽利 E2b～E3b 式期に比定される。また大別段階ごとでは、1段階が11b 期・加曽利 E2b 式期、2段階が11c1～11c2 期・加曽利 E2c1～E2c2 式期、3段階が12a～12b 期・加曽利 E3a～E3b 式期と考えられる。

3 千葉県における連弧文（系）土器の様相

（1）施文域構成からみた連弧文（系）土器の型式学的特徴

第2～4図は、千葉県内出土の連弧文（系）土器のうち、遺存状況が良好な個体を施文域構成別に分類・配列したものである。

第2図は施文域構成が口縁部と胴部の2帯構成となるもので、1～10は口縁部・胴部双方に主文様が施される連弧文土器、11～20は主文様が口縁部のみ施される連弧文土器、21は主文様が胴部のみ施される連弧文土器、21は主文様を欠く連弧文系土器である。主文様のうち、弧線文は2本沈線と3本沈線があり、波状文は2本沈線に限定される。地文は撚糸文が多く、次いで縄文となる。口唇部文様は、平行沈線と2列の円形刺突文が主体となり、円形刺突文を交互に施すもの（1・5・10）も認められる。主文様以外の文様としては、胴部の懸垂文や区画文が一般的で、とりわけ下端が開放した縦長の長方形区画文（6・15～17）が目立つほか、逆「U」字状区画文では2本沈線のもの（9・10・18）と単沈線のもの（7・8・19）があり、後者は長方形区画文と同様に区画外の地文が磨消される例が多い。

第3図は施文域構成が3帯構成となるものである。施文域の分割位置は、器形括れ部より上位の口縁部を二分するもの、器形括れ部より下位の胴部を二分するもの、器形括れ部を挟んで頸部に施文域を設けるものの三者がみられるが、ここでは一括した。3帯の施文域それぞれの呼称として、ここでは口縁部・頸部・胴部と仮称しておく。第3図1・2・5～11は主文様が口縁部・頸部に施される連弧文土器、3・4は主文様が口縁部・頸部・胴部に施される連弧文土器、12～18は主文様が口縁部のみ施される連弧文土器、19・20は主文様が頸部のみ施される連弧文土器、21・22は主文様を欠く連弧文系土器である。地文は14・15が条線文となるほかは、やはり撚糸文が卓越し、次いで縄文となる。口唇部文様は、2列の円形刺突文を主体としつつも、交互刺突文（1・2）や、1列の押引状文（10・19）、爪形文（16・17）、1列の円形刺突文（15・18・21）も認められる。胴部には大半が懸垂文ないしは区画文が施文される。

第4図1～4は、類例は少ないが施文域が3帯より多い構成と考えられるものである。1は3本一単位の沈線による波状文が少なくとも4段施される連弧文土器である。2～4は主文様を欠く連弧文系土器であるが、波状文が平坦化して横位の平行沈線となり、本来の施文域分割文様との区別が難しいものもある。

第4図5～17は、施文域分割がなく、口縁部のみ主文様が施される連弧文系土器である。5～8は主文様

のみ、11～17は主文様下位に懸垂文や区画文が付帯するもので、12～17は弧線文と懸垂文の形態がY字状を呈する土器群（長山2010）と考えられる。

第4図18～25は、連弧文ないしは波状文が施される深鉢形土器以外の器種を一括した。体部に施文域をもたない18～21、体部に施文域を作出する22～25があり、21と25は壺形、その他は浅鉢形を呈する。地文は撚糸文や条線文もあるが、管見では縄文が多い印象である。とりわけ浅鉢形土器は、器形復元に至らず第4図に呈示していない資料も多く、一定数の個体が千葉県内に広く分布している状況が指摘できる。

（2） 連弧文（系）土器と他型式との共伴事例について

次に千葉県内出土の連弧文（系）土器の時期的様相について検討する。第5～7図は、主に加曽利E式土器と連弧文（系）土器との共伴資料を遺構単位で示したもので、おおむね第5図に県北部、第6図に県中央部、第7図に県南部の遺跡出土資料をまとめた。

第5図のうち施文域が2帯構成となる連弧文（系）土器は、松戸市子和清水貝塚924号土坑と柏市小山台遺跡SK116Bで加曽利E2式（5・9・10）、柏市出山遺跡SI03で口縁部の渦巻文がほぼ円文へ変容した加曽利E式（12・13）と共伴する。施文域が3帯構成となる連弧文（系）土器は、山武郡横芝光町東長山野遺跡41号住居跡で加曽利E2式～E3式（24）、出山遺跡SK175で胴部が渦巻状の隆帯文となる加曽利E3式期の土器（16）、同遺跡SI08で渦巻文を波頂部とする波状口縁の加曽利E3式（18）が伴う。また施文域が多段化した連弧文土器は、印旛郡酒々井町飯積原山遺跡SK633で加曽利E3式（22）、施文域を欠く連弧文系土器は、小山台遺跡SK002で渦巻文が明瞭な加曽利E3式（7）、船橋市新山東遺跡001号住居跡で渦巻文が消失した加曽利E3式（2・3）、波状文を施す浅鉢形土器は佐倉市吉見稻荷山遺跡1号住居跡で加曽利E2式（20）とそれぞれ伴出している。

第6図のうち施文域が2帯構成となる連弧文（系）土器は、市原市中潤ヶ広遺跡C045号住居跡で加曽利E2式（18・19）、市原市草刈遺跡171A号住居跡で加曽利E2式～E3式（25・26）、千葉市芳賀輪遺跡第153号竪穴住居跡と市原市土宇遺跡第35号住居址で加曽利E3式（4・5・22・23）とそれぞれ伴出する。施文域が3帯構成となる連弧文（系）土器は、土宇遺跡例（21）のほか、中潤ヶ広遺跡E011号住居跡、芳賀輪遺跡第56号土坑、千葉市有吉北貝塚SB049、市原市奈良大仏台遺跡SB03等に伴出例があり、時間幅はあるもののいずれも加曽利E3式期の所産（2・7・8・14・16）と考えられる。施文域を欠く連弧文系土器は、東金市羽戸遺跡SI020で口縁部が円文となる加曽利E3式（28）、波状文を施す浅鉢形土器は有吉北貝塚SK270で加曽利E3式（10・11）・曾利Ⅲ式（12）とそれぞれ伴出する。

第7図のうち施文域が2帯構成となる連弧文（系）土器は、木更津市伊豆山台遺跡SI009と南房総市深名瀬島遺跡第8号住居址で加曽利E2式（3・25・26）と曾利Ⅲ式（4・27）、深名瀬島遺跡第4号住居址で曾利Ⅱ～Ⅲ式（23）、同遺跡第2号住居址で加曽利E3式期の土器群（17～20）と共伴する。施文域を欠く連弧文系土器は、君津市鹿島台遺跡SI091で曾利Ⅱ式（11～14）、木更津市台木A遺跡051号住居で加曽利E3式（7）と伴い、同遺跡004号住居は5と同種の連弧文系土器（9）が施文域が3帯となる連弧文土器（8）と共伴する。

4 まとめ

本稿では千葉県内出土の連弧文（系）土器について概観した。型式学的なバリエーションは関東地方西南部とほぼ同一の要素を確認し得るが、地域的特色として、①地文は撚糸文と縄文が主体となる点、②弧

線文・波状文の沈線間の地文が磨消される個体が多い点、の2点が千葉県における連弧文（系）土器のあり方と言える。その背景として、今回は時期別の出土量を検討するに至らなかったものの、管見の限りにおいて出土する連弧文（系）土器の大半が加曽利 E3 式期の所産である点が一因と考えられる。またこれら加曽利 E3 式期の連弧文（系）土器は、千葉県の当該期の土器群の中で少数ながら安定した出土量が確認される。こうした傾向は東京都でも武蔵野台地東部の市区と共通しており、「千葉型連弧文土器」（戸田前掲）を含め、連弧文（系）土器の分布の中心が本段階から東方の東京湾岸地域へ移動していることを示している。他方、主に東葛地域や房総半島南部地域では、個体として加曽利 E2 式期の連弧文（系）土器の出土が複数例認められる。時期ごとに異なった分布を示す房総の連弧文（系）土器について、今後も検討を重ねていきたい。

註

- (1) 第1図の編年表中の土器は縮尺1/12で統一した。また第1図に用いた資料の出土遺跡は以下のとおりである。町田市多摩ニュータウンNo.939遺跡（1・11）、世田谷区桜木遺跡（2・34・37・38）、調布市原山遺跡（3）、羽村市山根坂上遺跡（4・7）、武蔵村山市吉祥山遺跡（5）、八王子市宇津木台遺跡 D 地区（6・15）、稲城市多摩ニュータウンNo.9遺跡（8・9）、八王子市多摩ニュータウンNo.300遺跡（10・33）、新宿区三栄町遺跡（12）、町田市忠生遺跡 A 地区（13・29）、東久留米市自由学園南遺跡（14）、青梅市駒木野遺跡（16）、八王子市多摩ニュータウンNo.72・796遺跡（17）、多摩市／稲城市多摩ニュータウンNo.520遺跡（18・20）、立川市向郷遺跡（19・21）、西東京市下野谷遺跡（22・23・25・28・39）、町田市木曽森野南遺跡（24）、府中市武蔵台東遺跡（26・30・41）、世田谷区明治薬科大遺跡（27）、新宿区落合遺跡（31）、三鷹市第五中学校遺跡（32）、新宿区市谷甲良町遺跡（35）、目黒区大橋遺跡（36）、八王子市小比企向原遺跡（40）、多摩市和田・百草遺跡（42）、町田市多摩ニュータウンNo.245遺跡（43）。

参考・引用文献

- | | | |
|-------------------|--|---|
| 大網信良 | 2016 「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：連弧文系」『シンポジウム縄文研究の地平2016－新地平編年の再構築－』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会 | 紀要』第21号 千葉市立加曽利貝塚博物館 |
| 大内千年 | 2009 「第3章 中期の非在地系土器－房総半島におけるいわゆる曾利式系土器について－」『研究紀要』26（財）千葉県教育振興財団 | 黒尾和久 1995 「縄文中期集落の基礎的検討（1）」『論集宇津木台Ⅰ 宇津木台地区考古学研究会』 |
| 大内千年 | 2012 「房総半島における非在地系土器について－縄文時代中期後葉の曾利式系土器のあり方－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集 国立歴史民俗博物館 | 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』発表要旨 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 |
| 岡本 勇 | 1963 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第7号 横須賀市博物館 | 小暮伸之 2005 「富岡町前山 A 遺跡出土の太木8b・9式土器－キャリパー形深鉢の変遷と異系統土器について－」『福島考古』第46号 福島県考古学会 |
| 岡本 勇・戸沢久則 | 1965 「3 関東」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社 | 田川 良・小川和博 1982 「千葉県における縄文時代中期土器の変遷（Ⅰ）」『日本考古学研究所集報』Ⅳ 日本考古学研究所 |
| （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 | 1982 「縄文中期土器群の再編（図版）」『研究紀要1982（別冊）』 | 谷井 彪・宮崎朝雄ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 |
| 小川和博 | 1989 「南房総における加曽利 E 式土器－千葉県富浦町深名瀬島遺跡の研究Ⅰ－」『日本考古学研究所集報』XⅠ 日本考古学研究所 | 千葉縄文研究会編 2007 『千葉縄文研究 別冊1 千葉における中期編年基礎資料』 |
| 加納 実 | 1994 「加曽利 EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館 | 戸田哲也 1991 「東京湾を渡った縄文人」『東邦考古』15号 東邦考古学研究会 |
| | | 戸田哲也 2010 「連弧文土器の伝播－千葉から福島へ－」『考古学ジャーナル』604 ニュー・サイエンス社 |

永瀬史人 2002 「連弧文土器の再検討ー系譜と変遷に関する解釈の問題ー」『神奈川考古』38 神奈川考古同人会
 2008 「連弧文土器」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション
 長山朋弘 2010 「加曾利 E（新）式における土器系列の研究（1）」『古代』第124号 早稲田大学考古学会
 細田 勝 2008 「加曾利 E 式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
 山内清男 1940 「第IX輯 加曾利 E 式」『日本先史土器図譜』（復刻版 示人社 1997所収）

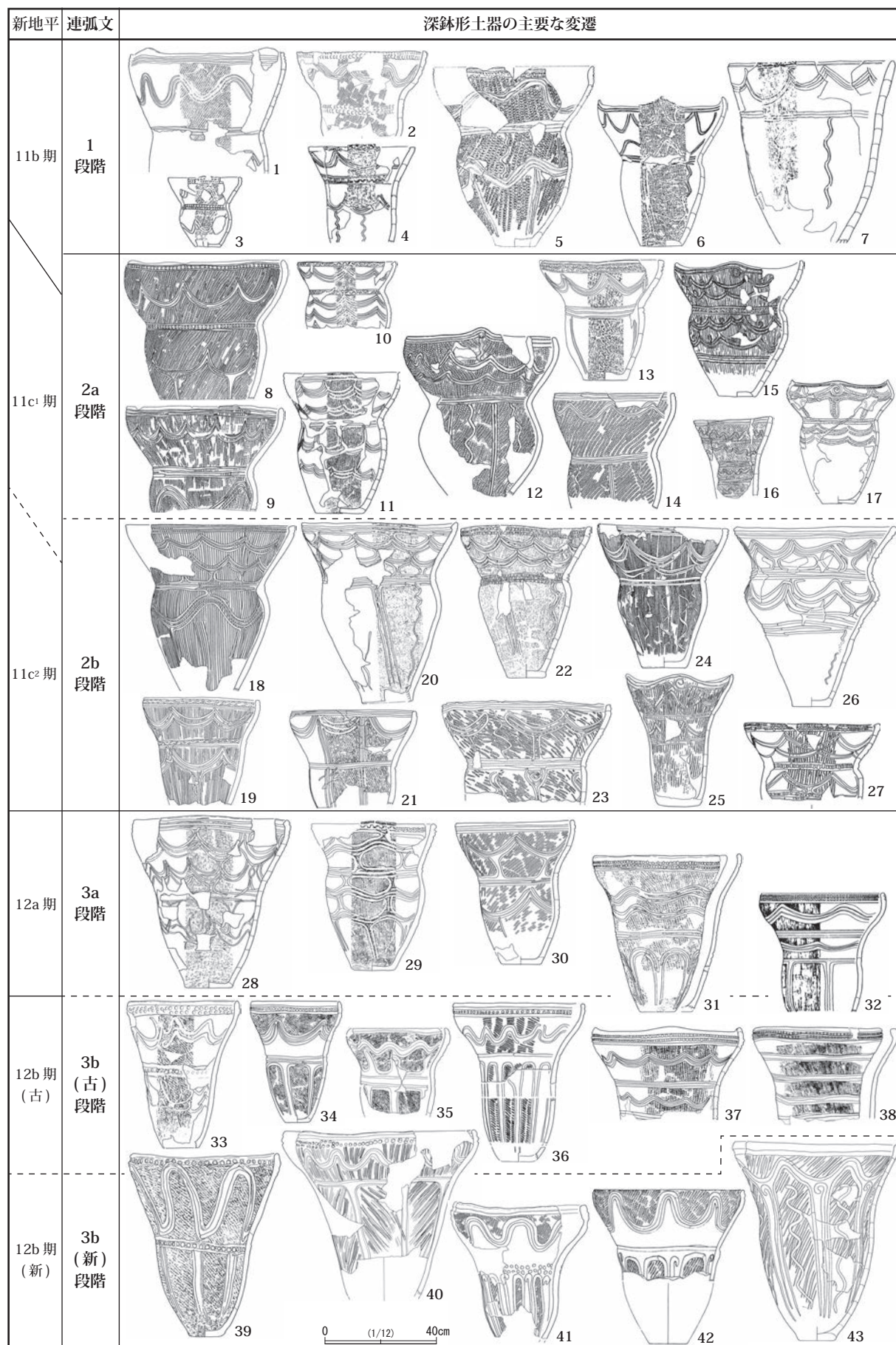
報告書一覧（遺跡名五十音順）

荒屋敷貝塚：(財)千葉県文化財センター 1978『千葉市荒屋敷貝塚』千葉県文化財センター調査報告11
 有吉北貝塚：(財)千葉県文化財センター 1998『千葉東南部ニュータウン19-千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)-』千葉県文化財センター調査報告第324集
 有吉南貝塚：(財)千葉県教育振興財団2008『千葉東南部ニュータウン40-千葉市有吉南貝塚-』千葉県教育振興財団調査報告第604集
 飯積原山遺跡：(公財)千葉県教育振興財団2015『酒々井町飯積原山遺跡4』千葉県教育振興財団調査報告第742集
 伊豆山台遺跡：木更津市教育委員会2000『木更津市文化財調査集報4-伊豆山台遺跡・金鈴塚遺跡-』
 磯花遺跡：佐原市発掘調査会・磯花遺跡調査団1984『佐原市 磯花遺跡Ⅲ』
 鹿島台遺跡：(財)千葉県教育振興財団2011『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書13-君津市鹿島台遺跡(B区)-』千葉県教育振興財団調査報告第653集
 草刈遺跡：(財)千葉県文化財センター 1986『千原台ニュータウンⅢ草刈遺跡(B区)』/(財)千葉県教育振興財団2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅢ-市原市草刈遺跡(H区)-』千葉県教育振興財団調査報告第633集
 久保堰ノ台遺跡：(公財)千葉県教育振興財団2016『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書29-市原市久保堰ノ台遺跡1・2-』千葉県教育振興財団調査報告第751集
 小山台遺跡：(公財)千葉県教育振興財団2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告第775集
 子と清水貝塚：松戸市教育委員会1978『子と清水貝塚 遺物図版編1』松戸市文化財調査報告第8集 / 松戸市教育委員会1985『子と清水貝塚 遺物図版編2』松戸市文化財調査報告第11集

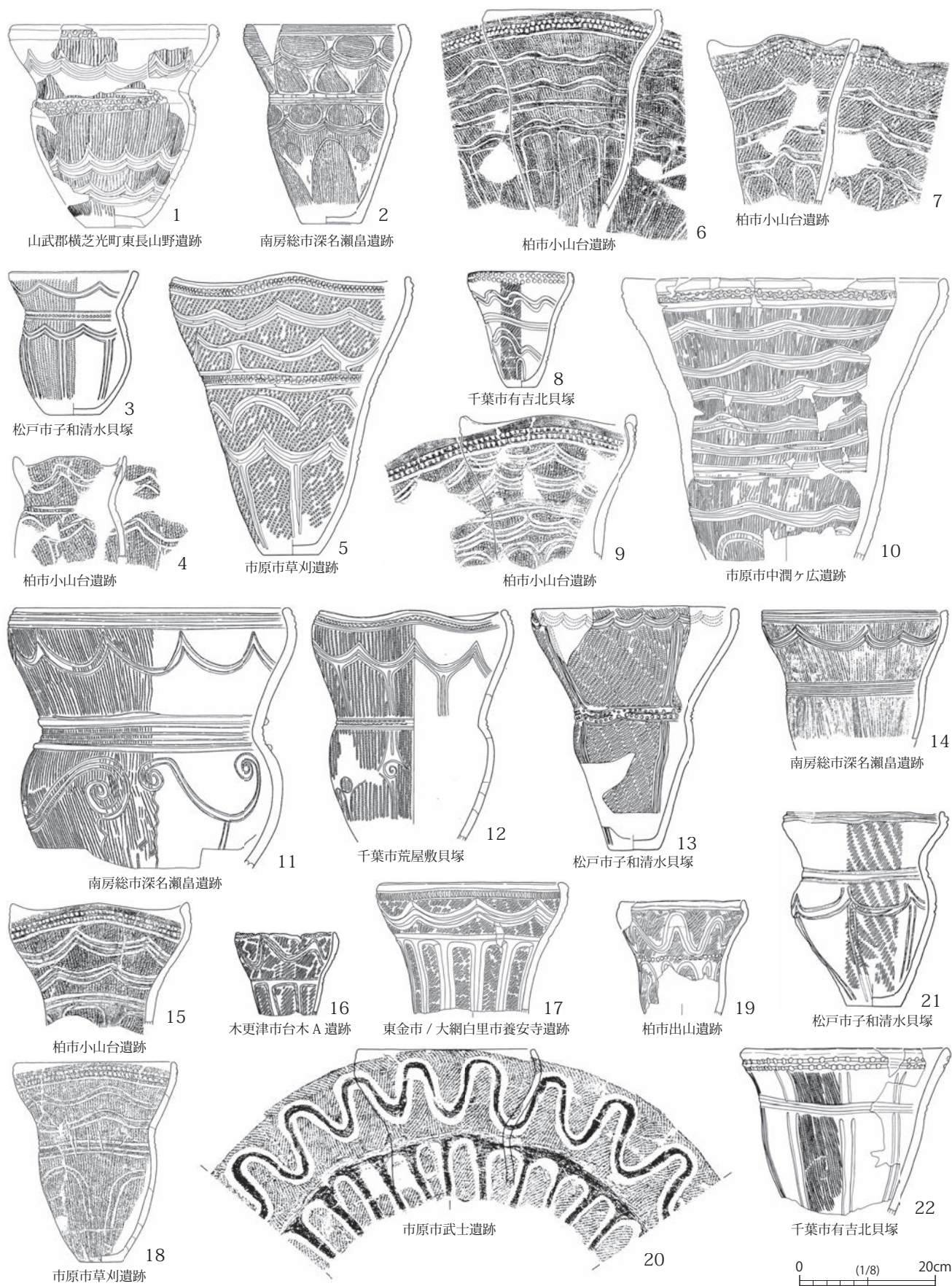
新山東遺跡：(財)千葉県文化財センター 2001『船橋市新山東遺跡』千葉県文化財センター調査報告第400集
 台木 A 遺跡：(財)君津都市文化財センター 1995『台木 A 遺跡』(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書第102集
 武士遺跡：(財)千葉県文化財センター 1998『市原市武士遺跡2』千葉県文化財センター調査報告第322集
 出山遺跡：柏市柏インター西土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査共同企業体2024『柏市柏インター西土地区画整理事業埋蔵文化財調査報告書-出山遺跡(第7次)-』柏市埋蔵文化財調査報告書103
 土宇遺跡：日本文化財研究所1979『千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告書』日本文化財研究所文化財調査報告書6
 中潤ヶ広遺跡：(財)千葉県教育振興財団2006『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-市原市中潤ヶ広遺跡(上層)-』千葉県教育振興財団調査報告第543集
 奈良大仏台遺跡：(財)市原市文化財センター 1992『市原市奈良大仏台遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第47集
 芳賀輪遺跡：千葉市教育委員会・(財)千葉市教育振興財団1996『千葉市芳賀輪遺跡-平成6年度調査報告書-』/千葉市教育委員会・(財)千葉市教育振興財団2007『千葉市芳賀輪遺跡』
 羽戸遺跡：(財)千葉県教育振興財団2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書16-東金市羽戸遺跡第1地点・第2地点-』千葉県教育振興財団調査報告第682集
 東長山野遺跡：北長山野遺跡調査会1990『東・北長山野遺跡』
 深名瀬島遺跡：富浦町教育委員会1987『千葉県富浦町深名瀬島遺跡調査報告書』
 坊作遺跡：市原市教育委員会2002『千葉県市原市坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅵ
 三直貝塚：(財)千葉県教育振興財団2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書-君津市三直貝塚-』千葉県教育振興財団調査報告第533集
 餅ヶ崎遺跡：千葉市教育委員会・千葉市埋蔵文化財調査センター 2019『千葉市餅ヶ崎遺跡』
 養安寺遺跡：(公財)千葉県教育振興財団2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32』千葉県教育振興財団調査報告第758集
 吉見稲荷山遺跡：(財)印旛都市文化財センター 2002『千葉県佐倉市吉見稲荷山遺跡(第5次)』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第192集

図版出典

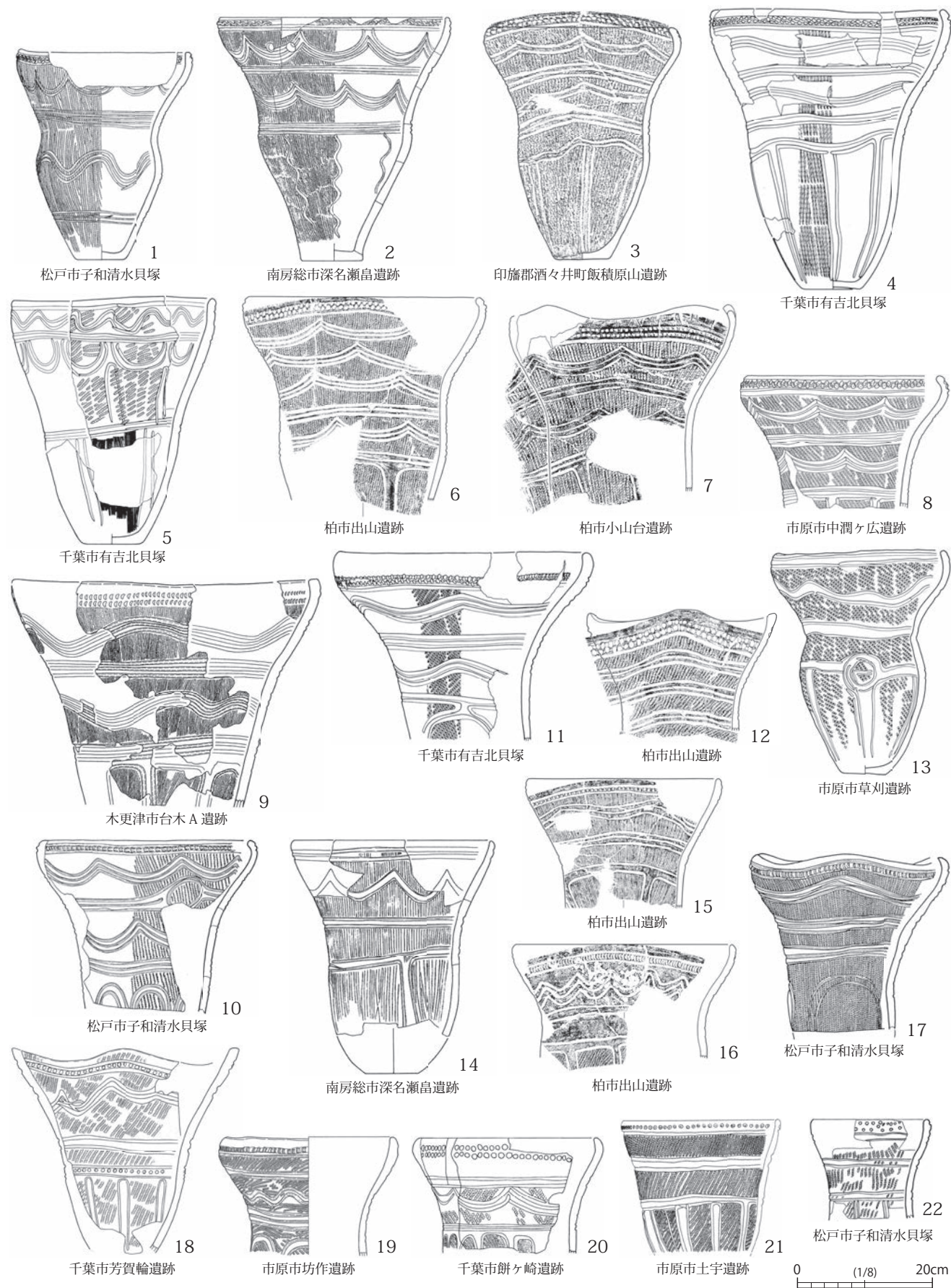
第1図：大網2016転載、第2～7図：報告書一覧記載の各報告書より転載のうえ作成



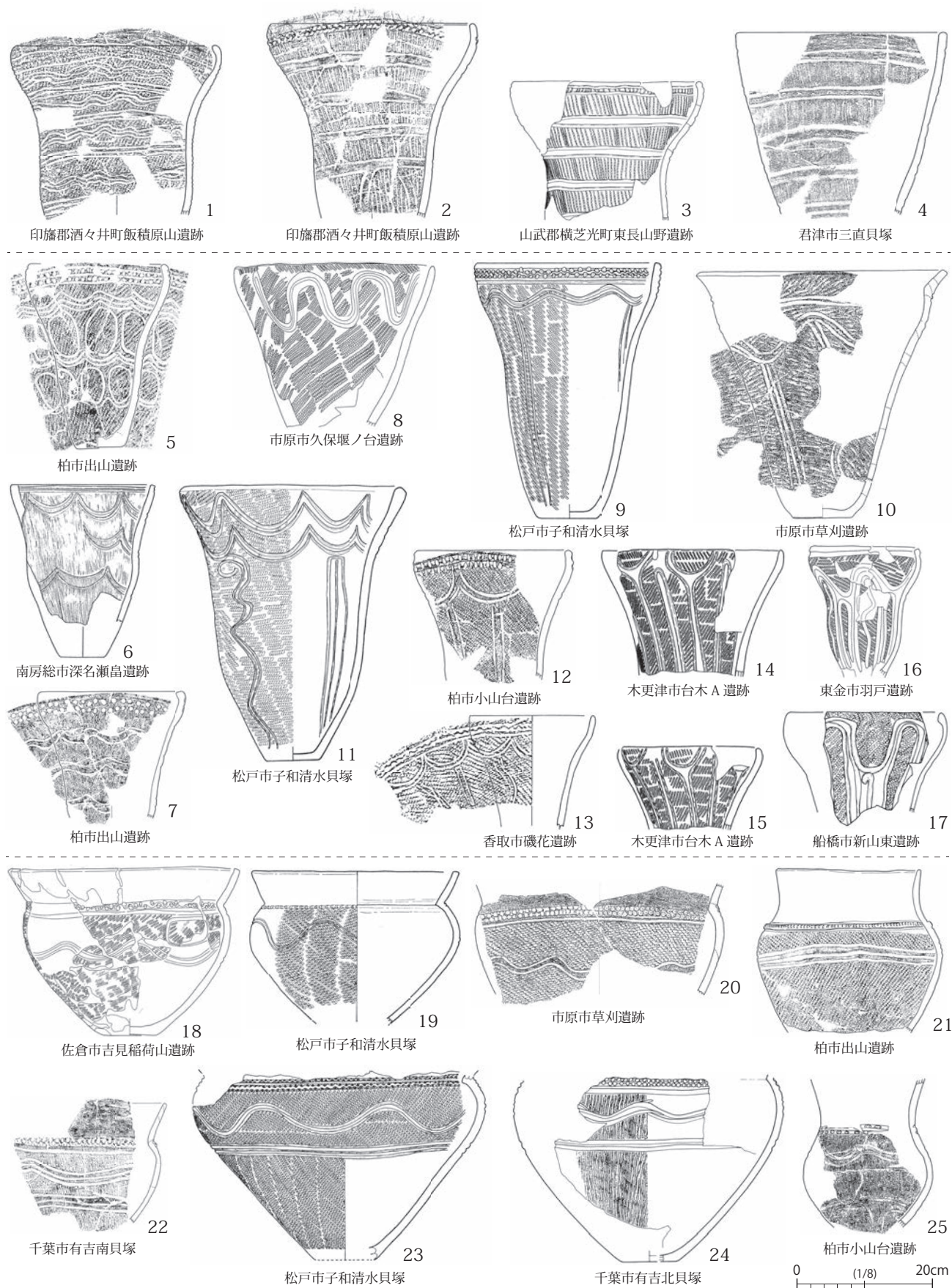
第 1 図 武蔵野・多摩地域における連弧文土器の変遷



第2図 千葉県内出土の連弧文（系）土器（1）

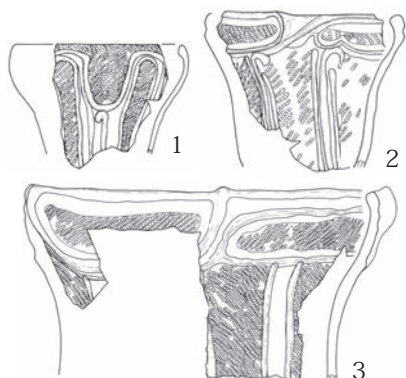


第3図 千葉県内出土の連弧文（系）土器（2）

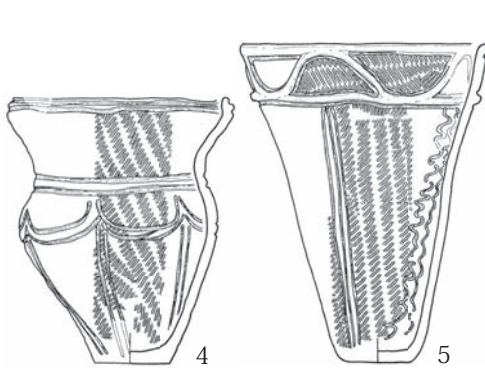


第4図 千葉県内出土の連弧文（系）土器（3）

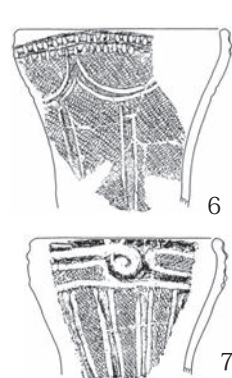
船橋市新山東遺跡 001 号住居跡



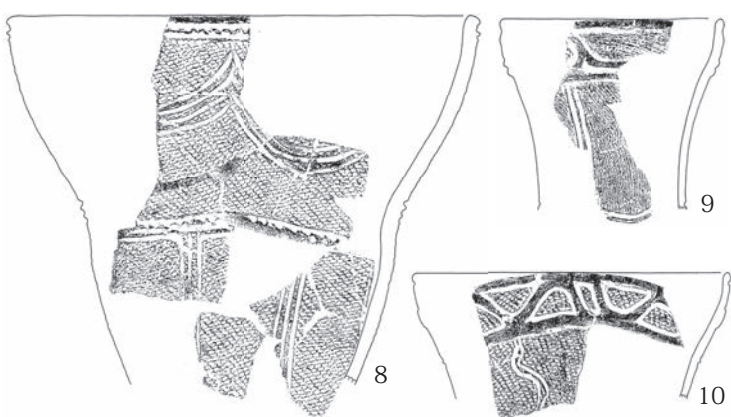
松戸市子和清水貝塚 924 号土坑



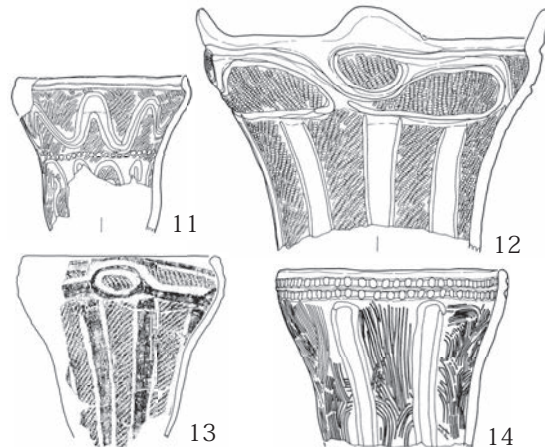
柏市小山台遺跡 (66-2)SK002



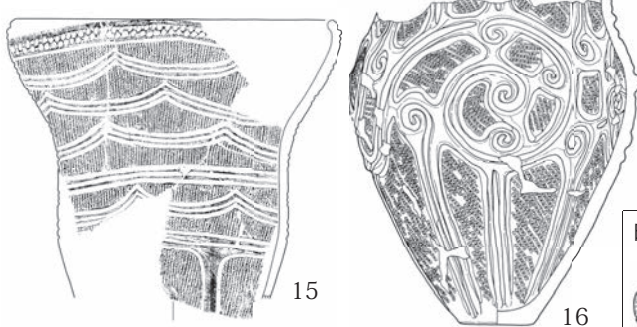
柏市小山台遺跡 (31)SK116B



柏市出山遺跡 SI103



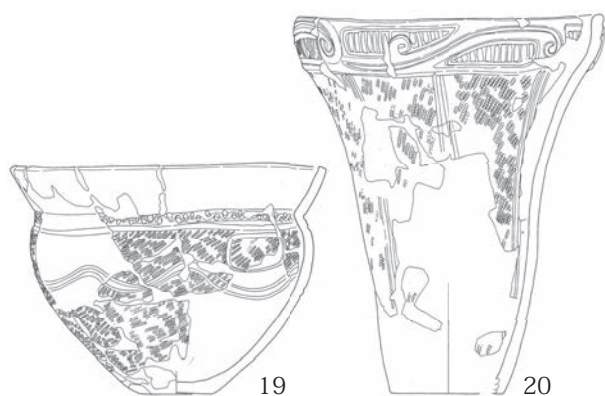
柏市出山遺跡 SK175



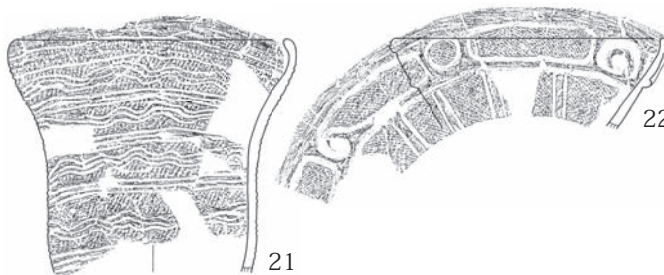
柏市出山遺跡 SI108



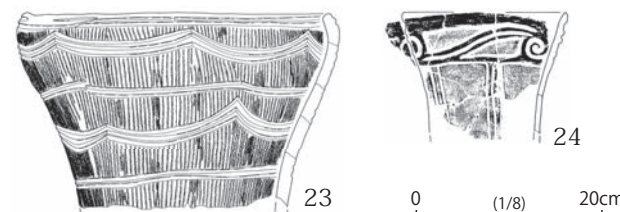
佐倉市吉見稲荷山遺跡 1 号住居跡



印旛郡酒々井町飯積原山遺跡 SK633



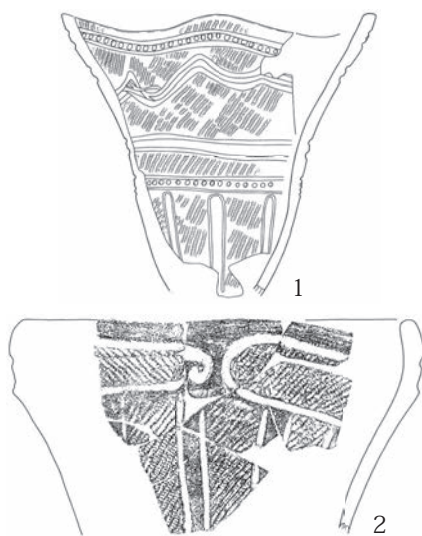
山武郡横芝光町東長山野遺跡 41 号住居跡



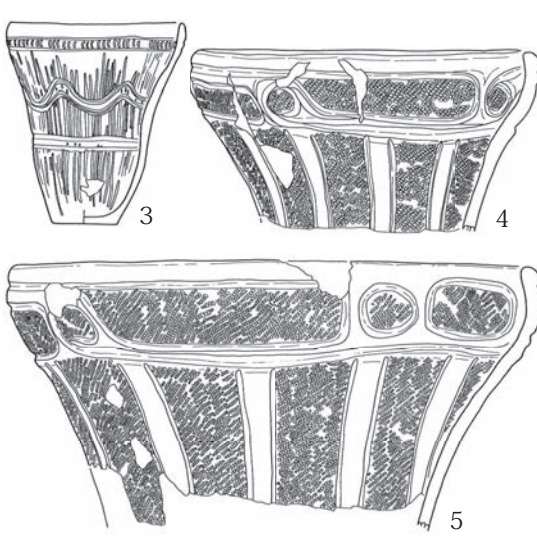
0 (1/8) 20cm

第 5 図 千葉県内出土の連弧文（系）土器と共伴資料（1）

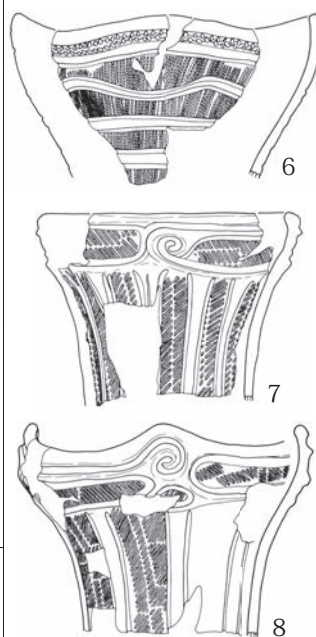
千葉市芳賀輪遺跡 第 56 号土坑



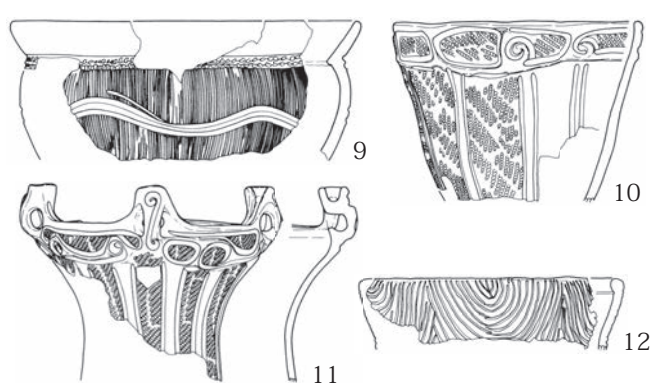
千葉市芳賀輪遺跡 第 153 号竪穴住居跡



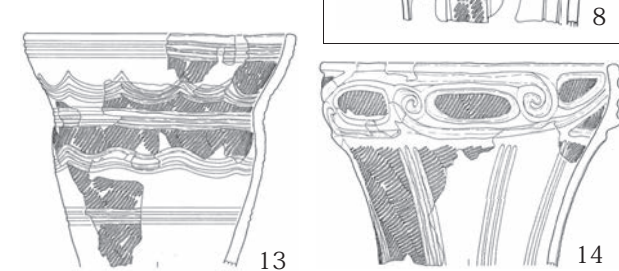
千葉市有吉北貝塚 SB049



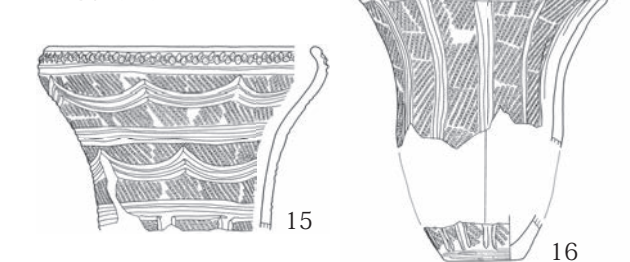
千葉市有吉北貝塚 SK270



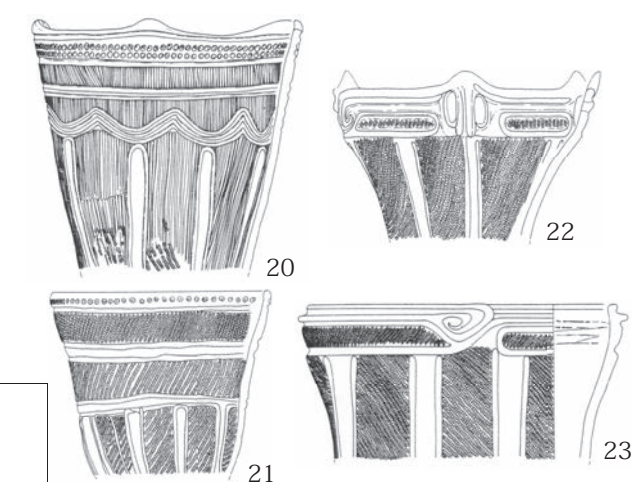
市原市奈良大仏台遺跡 SB03



市原市中潤ヶ広遺跡 E011 号住居跡



市原市土宇遺跡 第 35 号住居址



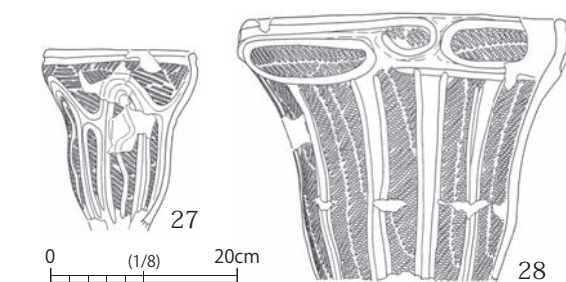
市原市中潤ヶ広遺跡 C045 号住居跡



市原市草刈遺跡 171A 号住居跡



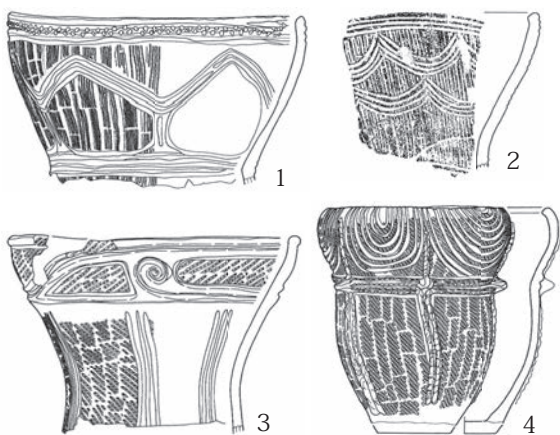
東金市羽戸遺跡 SI020



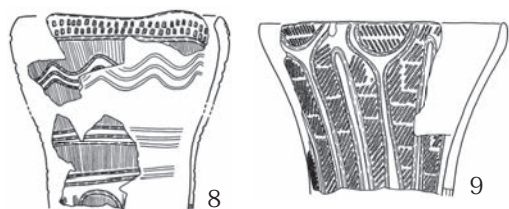
0 (1/8) 20cm

第 6 図 千葉県内出土の連弧文（系）土器と共伴資料（2）

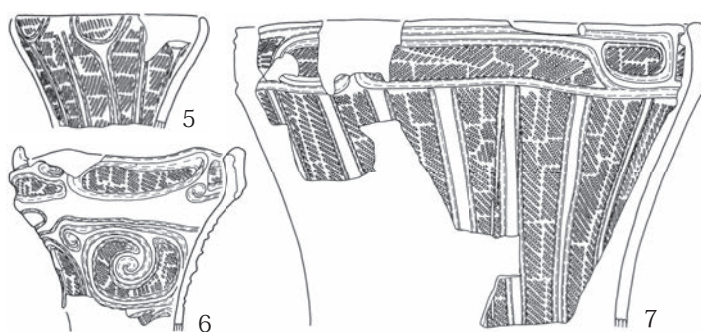
木更津市伊豆山台遺跡 SI009



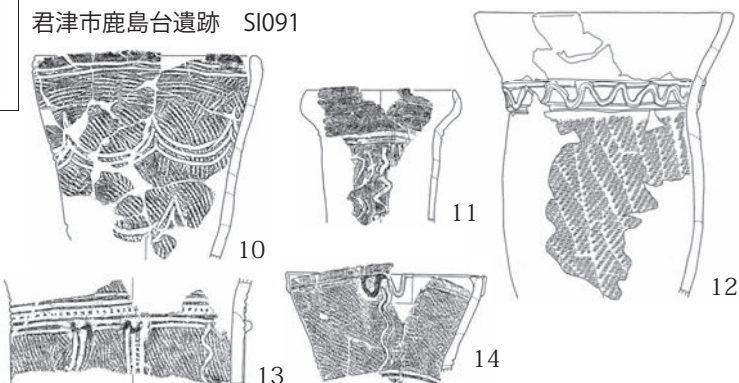
木更津市台木 A 遺跡 004 号住居



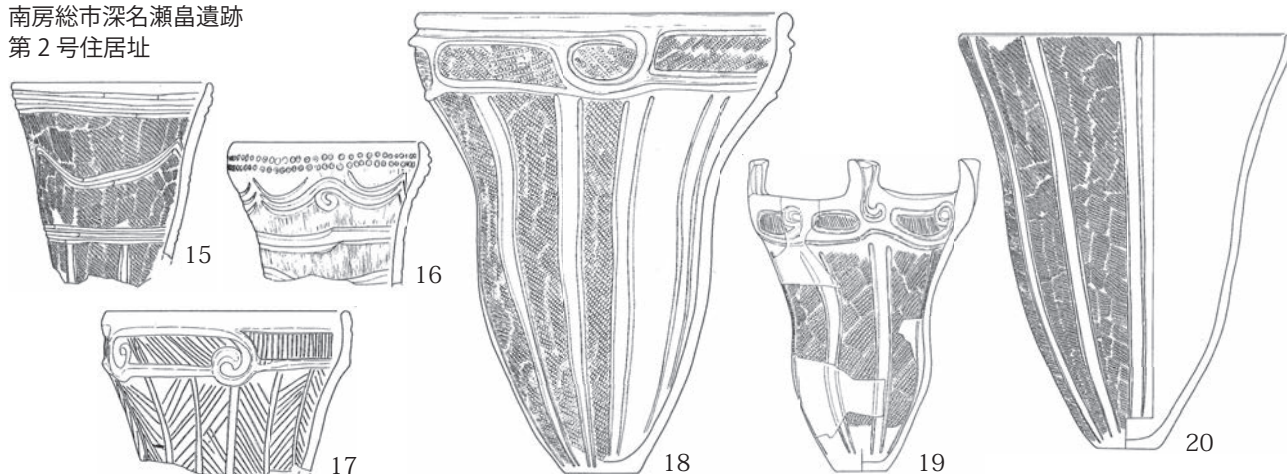
木更津市台木 A 遺跡 051 号住居



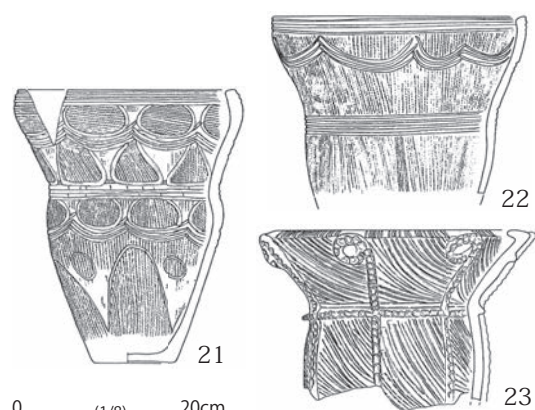
君津市鹿島台遺跡 SI091



南房総市深名瀬畠遺跡
第 2 号住居址

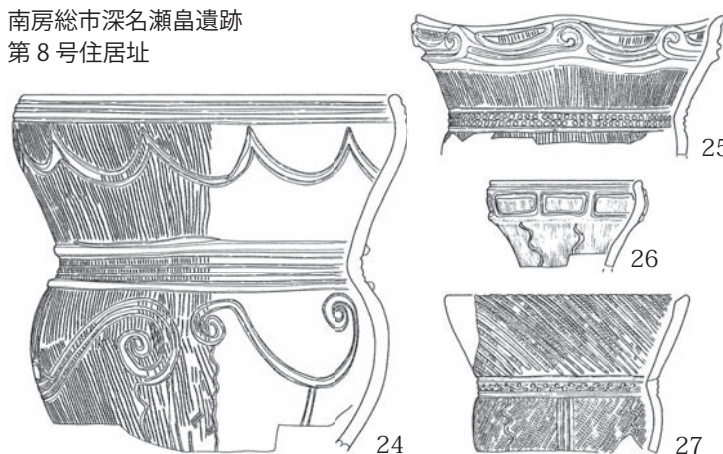


南房総市深名瀬畠遺跡 第 4 号住居址



0 (1/8) 20cm

南房総市深名瀬畠遺跡
第 8 号住居址



第 7 図 千葉県内出土の連弧文（系）土器と共伴資料（3）